



日本文学全集
47

井上靖

(二)

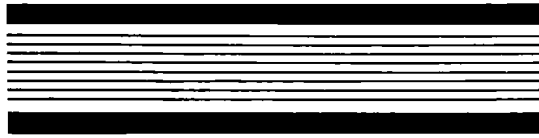


天平の甍・風濤・玉碗記・ある偽作家の生涯
狼災記・補陀落渡海記・羅刹女國・花の下・他

河出書房



井 上 靖 (二)



カラー版日本文学全集 47

1970©

昭和四十五年十二月二十日 初版印刷
昭和四十五年十二月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著 者 井 上 靖

発行者 中 島 隆 之

印刷者 草 刈 龍 平

装幀者 亀 倉 雄 策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

製 函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロース工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

井上靖(一)

天平の薨 四

風濤 一〇

玉碗記 一六

三ノ宮炎上 二二

グウドル氏の手套 二〇〇

姨捨 二〇八

ある偽作家の生涯 二一六

俘囚 二二五

孤猿 二四四

狼災記	三三
四つの面 <small>マスク</small>	三六
補陀落渡海記	三七
花の下	三八
小磐梯	三九
羅刹女国	四〇

注	小久保実	三八
年譜	福田宏年	三三〇
解説	山崎正和	三三三
色刷口絵	榊原和夫	
色刷挿画	花平の麓 上村松篁	
	風濤 平山郁夫	
	三ノ宮炎上 榎戸庄衛	
	ある生作家 大山忠作	
	狼災記	

井
上
靖
(二)

一章

朝廷で第九次遣唐使発遣のことが議せられたのは聖武天皇の天平四年で、その年の八月十七日に、従四位上多治比広成が大使に、従五位下中臣名代が副使に任命され、そのほか大使、副使と共に遣唐使の四官と称ばれている判官、録事が選出された。判官は秦朝元以下四名、録事も四名である。そして翌九月には近江、丹波、播磨、安芸の四か国に使節が派せられ、それぞれ一艘ずつの大船の建造が命じられた。大使多治比広成は文武朝の左大臣鳴の第五子で、兄の県守は養老年間に遣唐使として渡唐している。広成は下野守、迎新羅使の左副將軍、越前守等を歴任して、こんど新たに渡唐大使の大任を帯びたわけであった。副使の中臣名代は鎌足の弟垂目の孫で、島麻呂の子である。

この年のうちに、遣唐使の主要人員は決定され、正式の任命をみた。知乗船事、訳語、主神、医師、陰陽師、画師、新羅訳語、奄美訳語、卜部等の随員を初めとして、都匠、船工、鍛工、水手長、音声長、音声生、雑使、玉生、鑄生、細工生、船匠等の規定の乗組員から水手、射手の下級船員まで総員五百八十余名。

ただこの遣唐派遣の最も重要な意味をなす留学生、留学僧の銜達だけは、年内には決まらないで翌年に持ち越された。もともと時の政府

が莫大な費用をかけ、多くの人命の危険をも顧みず、遣唐使を派遣するということの目的は、主として宗教的、文化的なものであって、政治的意図というものは、若しあったとしても問題にすら足らない微少なものであった。大陸や朝鮮半島の諸国の変遷興亡は、その時々、於て、いろいろな形でこの小さい島国をも揺すぶって来ていたが、それよりこの時期の日本が自らに課していた最も大きい問題は、近代国家成立への急ぎであった。中大兄皇子に依って律令国家としての第一歩を踏み出してからまだ九十年、仏教が伝来してから百八十年、政治も文化も強く大陸の影響を受けてはいいたが、何もかもまだ混沌として固まっていらず、やっと外枠が出来ただけの状態で、先進国唐から吸収しなければならぬものは多かった。人間の成長で言えば少年から青年への移行期であり、季節で言えばどこかに微かに春の近い気配は漂っているが、まだまだ大気の冷たい三月の初めといったところであるうか。

平城京はその経営に着手されてから二十三年、唐都長安を模したという南北各九条、東西各四坊の整然たる街衢は一応完成はしていたが、都の周辺には、夥しい流民が屯ろし、興福寺、大安寺、元興寺、薬師寺、葛城寺、紀寺を初めとして四十余寺が建立されていたが、壮大な伽藍には空疎なものが漂い、経堂の中の經典の数も少かった。

年が改まると、全国から選ばれた精進潔斎の僧侶九人が、こんどの渡唐の成功を祈るために、香椎宮、宗像神社、阿蘇神社、国分寺、神宮寺等に送られ、五畿七道に於ては海神の怒りを和らげるための海電王経が誦誦され、伊勢神宮を初めとする畿内七道諸社には奉幣使が派遣された。

大安寺の僧普照、興福寺の僧栄叡とに、思いがけず留学僧として渡唐する話が出されたのは、二月の初めであった。二人は突然、當時仏教界で最も勢力を持っていると言われていた元興寺の僧隆尊の許に呼び出されて、渡唐する意志の有無を訊ねられた。普照も栄叡も、隆尊と親しく言葉を交えたのはこの時が初めてであった。二人とも隆

尊の華嚴けだんの講義を聞いたことはあったが、平生は傍へも近寄れぬ相手であった。

栄叡は体が大柄で、いつも固い感じのごつごつした体を少し折り曲げて猫背にしており、顔には不精髯を生やしていることが多く、一見すると四十歳近くに見えたが、まだ三十歳を過ぎたばかりであった。普照の方は栄叡よりずっと小柄で、貧弱な体を持ち、年齢も二つ程若かった。

栄叡は隆尊の話の聞くと、直ぐ、よし行ってやるといった不遜とても解されそうな態度で応諾したが、普照の方は返事をするまでに多少時間がかかった。普照は隆尊の顔を覗き込むようにして、一体唐へ渡って何を学んだらいいのかと訊ねた。普照らしい質問であった。何も生命を賭けてまでして唐土を踏まなくても、勉強はどこでもできる筈である。自分は今までにそれをして来ている。そのように、普照のひどく冷たい印象を人に与える二つの小さい眼は語っていた。これまで若手の秀才と言えば、いつも普照の名が挙げられて来たが、秀才という言葉を普照は軽蔑していた。自分はただ殆ど一日中机から離れないでいるだけだと思った。

二人の全く型の異なった若い僧侶に、隆尊は持前のおだやかな口調で説明した。日本ではまだ戒律けいりつが具もわっていない。適当な伝戒の師を請じて、日本に戒律を施行したいと思っている。併し、伝戒の師を招くと一口に言っても、それは何年かの歳月を要する仕事である。招ぶなら学徳がくとくすぐれた人物を招ばなければならないし、そうした人物に渡日を承諾させることは容易なことではあるまい。併し、次の遣唐使が迎えに行くまでには十五、六年の歳月がある。その間には二人の力でそれが果せるだろう。

普照は伝戒の師を請ずるのにそれだけの長い歳月が必要だという隆尊の言葉に驚かされたが、伝戒の師の選択には、それだけこちらにも具もわったものができていなければならぬであろうし、またこちらで白羽の矢を立てた人物の招聘を実現するには、人と人との関係も何か

とものを言ってくるであろう。そうした立場を作るためには、どうしても十数年の唐土の生活が必要になって来る。そのようなことを隆尊は言っているのであるうと思つた。この時、普照が入唐の話を承諾する気になったのは、十数年という長期に亘る唐土の生活が許されるということであつた。もつと短期の還学僧きんがくそうとしての入唐なら、そのために一つしかない生命を賭ける気にはならなかつたが、それほど長期の入唐なら、一か八かの危険を冒して遣唐船に乗り込むことも強ち悪いことではないと思われた。

隆尊の許を辞した二人は、早春の陽が散っている興福寺の境内で語り合つた。栄叡はさすがに多少昂奮している様子で、いつもより少し早口に喋つた。彼はこんどのことは知太政官事舎人親王と隆尊とが相談の結果持ち上がった話に違いないと見ていた。

課役を免れるために百姓は争つて出家し、流亡して来た。ここ何十年間かそうした社会現象を食いとめるために、幾十かの法律が次々に出されていたが、効果は一向にあがっていなかった。問題は百姓ばかりではなかつた。僧尼の行儀の墮落もまた甚しく、為政者の悩みの種になっていた。僧尼令二十七条という僧尼の身分資格を規定した法令も出ているが、実際にはそんなものは無力であつた。仏教に帰入した者の守るべき規範は何一つ定まっていず、比丘および比丘尼の受けるべき具足戒ぐそくけいは三師七証さんしちしうじう(戒場に参会する十人の師僧)の不足で行われていない。目下のところでは仏徒は自誓受戒するが、三聚淨戒さんじゆじゆけいを受ける程度で放埒に流れ次第である。これらの仏徒を取締まるのは、まず唐より傑でれた戒師を迎えて、正式の授戒制度を布くことである。人為的な法律は無力であり、仏徒が信奉する釈迦の至上命令を以てこれに臨むまもるはなかつた。正しい戒儀を整えることが、現在の日本の仏教界で一番必要なことは誰の眼にも明らかなことであつた。こんどの遣唐使派遣の機に、二人の青年僧を渡唐させようとする舎人親王や隆尊の意図もここにあるわけであつた。

一少くともわれわれの使命はわれわれ二人の生命を賭けるだけの価値

はあるようだ。」

栄叡は言ったが、普照の方は黙っていた。いつも、自分自身のことしか彼は頭の中になかった。戒師を招ぶことがどのような意味を持つかというにはあまり興味はなかつた。それより十五、六年間に自分が学び得る經典の量の方が遙かに重要な問題であつた。その經典の重さが普照には実際に感じられるような気がした。そしてそのことが普照の冷たい眼を多少いつもとは違った憑かれたようなものにしていった。

栄叡は美濃の人、氏族（詳）ならず、興福寺に住す。機捷（機捷）神叡にして論望（論望）当り難し、瑜伽唯識（瑜伽唯識）を業となす。——渡唐前の栄叡については、『延暦僧録』に依つて、これだけのことを知るだけである。同じように渡唐前の普照については、興福寺の僧であり、一に大安寺の僧だつたとも言われていたという甚だ頼りない一事だけが、われわれに残されている。併し、それでも普照の方は、『統日本紀』に「丙午、授正六位上白猪与呂志女從五位下、入唐学問僧普照之母也」という一条があつて、彼の出生の一端におぼろげながら一つの照明が当てられている。即ち普照の母は白猪氏で、名は与呂志女、天平神護二年（西紀七六六年）二月八日に、正六位上から從五位下を賜つている。白猪氏の祖は百濟の王辰爾（辰爾）の甥であり、その一族には外国關係のことに携わつた者が多いことが知られている。

大使広成が拜朝して節刀を受けたのは閏三月二十六日であつた。節刀は帰国後返還するもので、これを受けることは、準備がここに全く成つて、今や渡唐大使として全權を委任されたということの意味し、それと同時に日和さえよければ待たなして解纜（解纜）しなければならぬ立場に置かれることでもあつた。

これに先立つて、三月一日に広成は山上憶良を訪ねている。憶良は曾て大宝二年の第七次の遣唐使の一行に少録（少録）として参加しており、渡唐の経験者でもあり、広成の兄とも親しかつたので、広成はそんな閑

係で挨拶に向向いたのである。三月三日広成に歌一首と反歌一首を贈つている。

神代より 言ひ伝てけらく そらみつ 大和の国は 皇神の いくしき国 言靈の 幸はふ国と 語りつき 言ひつがひけり 今の世の 人も悉 日の前に 見たり知りたり 人さには 満ちてはあれども 高光る 日の朝廷に 神ながら めでの盛りに 天の下申し給ひし 家の子と 撰び給ひて 大み言 戴き持ちて もろこしの 遠き境に 遣され 罷りいませ 海原の 辺にも沖にも 神づまり うしはきいます 諸の 大み神達 船のへに みち引きまをし 天地の 大み神達 大和の 大國魂 ひさかたの 天のみ空ゆ 天がけり 見渡し給ひ 事終り 歸らむ日は また更に 大み神達 船のへに み手うち掛けて 墨繩を はへたる如く あちかをし 值嘉のさきより 大伴の 御津の浜びに ただ泊に み船は泊てむ 恙く 幸くいまして早歸りませ

大伴の御津の松原かき掃きて吾立ち待たむ早歸りませ

難波津にみ船泊てぬと聞え来ば紐解きさきて立ちばしりせむ

反歌のあとの方は、夫の留守を守る広成の室に送つたものであつた。四月二日早暁、広成等は憶良の歌にある難波津へ向けて、奈良の都を發つた。一行の大部分はすでに出航地難波津に集まつていて、この日奈良から發つたものは広成等騎馬の一团三十名ばかりであつた。普照、栄叡等もこの一团の中に居た。寺々からは海路平安を祈念する鐘が鳴り響いていて、春ではあつたが、桜の蕾はまだ固く、暁の風は真冬の冷たさを持つていた。

道は大和平野を突切つて、真直ぐに北西へ伸びている。一行は王子を経て竜田山を越え、この日は国府で泊り、翌日国府を發つて、午少し前に難波の旧都へはいつた。ここは九年前の神龜元年から離宮の修

管工事が始められ、それが今だに引き続いて行われていて、ところどころに廷臣たちの邸宅が新しく造築されつつあった。春の光が白っぽく幾つかの工事場に散っている地帯を抜けると、やがて商館の立ち並ぶ繁華地区へはいった。一行は幾つかの橋を渡った。そして最後の橋を渡った時、急に潮の香を含んだ風が真向いから吹きつけて来るのを感じた。このあたりから左手の丘の中腹に難波館が見え、この方は建物の朱と青の色が鮮やかだが、続いて新羅館、高麗館、百濟館といった今は名前ばかりの古い建物が見え始め、その丘の尽きる前方には蘆が一面に生い茂った港の一部が望まれた。

間もなく一行は港にはいった。曾て三韓との交通華やかだった当時の殷賑さは憶ふべくもないが、それでも蘆の間からは、林のように立ち並んでいる何百という帆柱が見えた。港と言っても、ここはもともと何本かの川の河口が一緒になった外海への出口で、潮と真水とがぶつかり合っている広い水域には、夥しい数の大小の島や洲が散らばり、そこに密生している蘆は一見港湾全部を埋めているように見えていた。ここに入出入する船は、その蘆の生い茂っている島や洲の間を通るわけだが、船着場の方から見ると、蘆の間を滑って来るものとしか見えない。蘆の間には点々と沢山の浮標（水路標の杵）が立っており、その何本かには小さい鳥がとまっていた。その鳥の白さが、今日ここから遠く異境に旅立って行く人々の眼に滲みだした。

船着場には異変が起きていた。切岸にはかなりの距離を措いて四艘の大船が繋がり、見送人や見物人がその辺りに集まっていた。船着場の入口には繩張りがしてあり、見送りの家族の者だけがその内部へはいることを許されている。繩張りの中だけでも二千人程の人間が居るのであるのか。女の多いのが目立っている。老婆も、若い女も、子供もいる。繩張りの外の見物人はもう少し多く、こちらには流人や乞食の姿も混じっている。時折、読経とのりとの声がその船着場の混乱と騒擾の中から、急に大きく盛り上がりは聞えて来て来た。

旅人の宿りせむ野に霜ふらば吾が子羽くぐめ天の鶴群。——という

万葉集の巻の九の歌は、この時の遣唐船に一人子を送り込んだ母の歌である。もう一つ巻八に笠朝臣金村がこの日の入唐使に贈った歌が載っている。波の上ゆ見ゆる小島の雲がくりあな息つかし相別れなば。——併し、これは夫を送る妻の歌で、笠金村が知人のために代作してやったものであろう。

大使広成等三十人の、昨朝都を発って来た一団は、船着場の一角で公私の見送人たちとの挨拶をすませると、こんどはそれぞれ違った船に乗って旅立つ自分たちだけで互いに水盃をした。

四艘の船は、いずれも長さ十五丈、幅一丈余の大船で、百三、四十人の乗員ならそう窮屈ではなく収容できる大ききだったが、造った国が違うだけに、少しずつ形が異なっていた。大使広成の乗る第一船は船の中央部が相当に広くなっており、副使中臣名代の乗る第二船はそれに較べるとずっと狭かった。それから船中に設けられてある屋形の恰好もその位置も異なっていた。判官の乗り込む第三、第四の船は、これらの船だけが殆ど舷側をつけるように繫留されていたが、船尾の形はまるで違っていた。第三船のそれは竜のおとし子宛らに大きく反り曲って、第四船よりも一問程高かった。

乗組員の誰にも、自分の乗る船が他よりいいか悪いかは判断できなかった。これはこれらの船の建造を受け持った造船使長官にも次官にも判らなかつたし、直接木材を刻んだ近江、丹波、播磨、安芸の四か国の船大工たちにも見当がつかなかつた。ただどの船も帆柱だけは船の中央部に付けられてあった。百濟船の様式をとったもので、帆柱が船の中央部より外れたところにある唐の船とは違っていた。日本の船大工たちは漠然と昔から関係の深かった百濟の船の方に信用を持っていたのであった。

夕方、四艘の大船は潮の満ちて来るのを待って難波津の波止場を離れた。岸を離れると、見送りの人々の眼には、船はどれもそのまま蘆の間に傾き沈んでしまいはしないかと思われる程重たげに見えた。どの船もそれぞれ百五十人近い人間と、それらの食糧と、滞在費に充て

る物資と、衣料、医薬、雜貨の類と、それから唐の朝廷へ獻ずる莫大な貢物とを満載していた。見送人のどよめきは船が岸を離れる時だけで、あとは船着場は寧ろひっそりとした表情を取った。四艘の船が全く港灣を出るには一刻ほどの時間がかかった。

四月三日難波津を發航した四船は武庫、大輪田泊、魚住泊、韓泊、碑生泊、多麻の浦、神島、備後長井浦、安芸風速浦、長門浦、周防國麻里布浦、熊毛浦、豊前分間浦等の内海の港々に、あるいは寄港し、あるいは碇泊して、その月の中頃に筑紫の大津浦に到着した。そしてこの本土に於ける最後の港で、四艘の船は順風を待つために何日かを過ごした。

そして愈々、広成の一行が大津浦を發航して外海へ乗り出したのは、節刀を受けてから約一月経った四月の終りであった。

大津浦からは唐に渡るには二つの航路があった。天智天皇の第五次遣唐船まではいつてもここから志岐対馬に向い、更に南朝鮮の西海岸に沿って北上し、渤海湾口を横断、山東の萊州が登州のいずれかに上陸して、それから陸路を南下して洛陽より長安にはいつていた。併し、これは南朝鮮が日本の勢力範囲にあつて初めてその安全が保証される航路で、新羅が半島を統一してからは、否応なしにはほかの航路に依らなければならなくなつていた。第六次以後の三回はいつも大津浦を發つと西航して、志岐海峡を過ぎ、肥前直嘉島に出て、そこから信風を得ていっしきに支那海を横断、揚子江を中心とする揚州、蘇州の間のことかへ漂着するという方法が採られていた。勿論広成らの場合もこの航路に依らうとしていた。

普照と栄叡の乗り込んだ船は、判官秦朝元の第三船であった。同じこの船にもう二人の留学僧が乗っていた。一人は名を戒融、一人は玄朗と言った。戒融は一人だけ發航当日に大津浦から乗り込んで来た筑紫の僧侶で、普照と同年配であったが、大柄な体のどこかに傲慢なものをつけていた。玄朗の方は二つ三つ若かった。玄朗は紀州の僧で、

ここ一年程大安寺に来て居たということだったが、普照も栄叡もこの若い僧にこれまで会ったこともなく、またその名を聞いたこともなかった。容貌も整つていて、どことなく育ちのよさがその言動の中に感じられた。

船は筑紫の大津浦を出た最初の夜から、特に海上が荒れていたわけではなかったが、外海の大きい波浪に弄ばれて、木の葉のように揺れ動いた。船員を除いた殆ど全部の乗員がみな食物も喉を通らなくなり、ぐったりと死んだように横たわつた。そしてそうした状態がその夜から何日も続いた。その中で普照だけは例外だった。初めの二日は人並みに苦しんだが、三日目には頭の痛みも胸のむかつきも取れ、正坐して船のかなり大きい動揺にも平気で身を任せていることができた。併し、他の三人の留学僧たちが、自分の傍で船量に苦しんでいるのを朝から晩まで見ていることは、普照にとつても氣持のいいことではなかった。

中でも栄叡が一番ひどく傷めつけられていた。いつも口を半開きにして、そこから苦しそうな小さい呻き声を吐きづめに吐いていた。栄叡の眉の濃い眼の鋭い顔は、またたく間に憔悴して、正面から眼を当てるのも氣の毒な程だった。玄朗の方は死んだようになって、物も言わなければ体も動かさなかつた。

ある日、海上に夕闇が漂い始めようとする時刻であったが、普照は、ふいに一番向うの席に横たわっている戒融から声をかけられた。「何を考へている？」

これが、何となく不逞不逞しい面構えと大入道のような感じの風貌を持つた同僚からの、面と向つて話しかけられた最初の言葉らしい言葉であった。乗船した時、姓名と生因を名乗り合つただけで、あとはお互いにすぐ船艙に取りつかれて、それぞれ孤独な闘いの中に身を置いていたので、言葉を交すような機会もないままに今まで過ぎていた。

普照は、仰向けに身を投げ出して眼玉だけこちらに向けている筑紫

出身の僧の方に、

「何も考えていない」

と答えた。普照には初対面の時からこの大入道が、留学僧に選ばれた程の何ものかを持っている人物とは思えなかった。いかにも筑紫あたりの僧侶でも持ちそうな垢ぬけのしないものをその風姿に付けているのが感じられた。

「俺は考えとる」

戒融は言った。

「何を考えているのだ」

「人間の苦しみというものは、結局は自分自身しか解らないということだな。そしてそれは自分が自分で処理するしか仕方がないものだ、それよりほかにどうすることもできないものだということだな。俺はいま苦しんでいる。俺ばかりではない。栄叡も玄朗もみな苦しんでいる。併し、お前はいま苦しんでいない。運のいいことに苦しみから脱け出してしまっている」

なんと厭なことを言う奴だろうと、普照は思った。言われた通り普照はいま自分が、きびしく考えれば、誰の苦しみにも同情していいことを思った。気の毒には思っているが、それをどうしようもないし、どうしてやろうという気持もなかった。それにしてもそれを指摘されることは愉快なことではなかった。すると、そういう普照の心を見透してでもいるように戒融は語を継いだ。

「気を悪くするな。俺はただ本当のことを言ったまでだ。俺とお前の立場が違っていれば、俺もまたお前と同じだ。人間とはそういうものだ」

そして戒融は、必ずしも普照に見せつけるためではなかったろうが、いきなり腹這いになると、もう一物もはいていない胃の中から何ものかを吐瀉しようとした。そして、ああ、苦しい、と口に出して言った。

普照は玄朗という年若い僧侶とは、それでも時々口をきくことがあ

った。大抵船が烈しく揺れ始めた時だった。玄朗は自分の方からいつも口をきいた。いかにも何か喋っていることで気を紛らせでもしているかのようには、喋り出すと、その口調には一種の訴えともひとり言ともつかない弱々しいが、併し、妙に熱っぽい調子があった。

「なに、これしき大丈夫だ。もう少しの辛抱だ。これで船が難破さえしなければ唐土へ着けるのだ。噂にきいている長安の都も、洛陽の都も見られる。そこを歩き、そこで物を考えることができる。大慈恩寺も、安国寺も、西明寺も、この眼で見ることができののだ。そのどこかの寺で俺は学ぶことになるだろう。知るべきことはいっぱいある。読まなければならぬものも山程ある。何もかもこの眼で見、この耳で聞く。広い唐土の全部から俺は吸収すべきものは吸収してしまおう。もう少しだ。もう少しの辛抱だ」

聞いていると、次第にそれの持つ妙に物悲しいものが、こちらの胸に伝わって来た。併し、確かにその言葉は、誰もが胸の奥に懐いている素朴なものに触れていた。ただそれは他の者の場合、確とは判らないが、何となく口に出すのを憚られるようなものであった。そんな時玄朗の顔は真蒼だった。玄朗の喋るのを、いつも誰も取りあわないう聞いていた。勝手に喋らせておけといつたところがあった。併し、一度だけ戒融が聞きとがめて、そんな玄朗の言葉を遮ったことがあった。

「余り夢みたいなことを言うな。船が無事に着くかどうかはまだ判っていないんだぞ」

止めを刺すような言い方だった。そんな時でも、栄叡の方は聞いているのかいなのか、終始黙って、眼を空間の一点に当てたままで、相変らず大きい息を口から吐き続けていた。

一同にとつてまさに地獄の苦しみというべき船艙から、併し、順々に脱け出すことができた。普照は別として、玄朗、戒融、栄叡と年の若い方から二、三日ずつ間隔を置いて解放されて行った。船艙が収まると、熱っぽい唐土への憧憬を口走っていた玄朗の口は重くなり、一

日中黙していることも珍しくなかった。一種説明し難い憂鬱がこの育ちのいい面差（おとこ）を持った青年僧を捉え始めていた。戒融は怠け癖がついたのか、船儘が癒（な）っても寝てばかりいた。栄叡は一日中と言つてもいい程法華經を誦（よ）っていた。普照はそんな同僚たちを時折横眼で睨（にら）みながら、この航海中にあけてしまおうと思つている『四分律行事鈔』の第七卷を片膝の上から離さないでいた。

この四人の学問僧の乗つていた第三船は、大使広成の第一船に続いて航行しており、すぐあとには第四船が続いていた。副使中臣名代の第二船は殿（とら）りの筈であつた。筑紫を出てから二十日ばかりの間は、前を行く第一船も、後の第四船も、かなり遠距離ではあつたが、ずっとその船影を認めることが出来た。夜になると互いに何回となく燈火で連絡し合つた。僚船の灯はいつも、お互いの間を埋めている波のためにある規則正しきで明滅して見えた。

二十一日目の夜、海上には深い霧が立ちこめ、そのため船は航行が困難となり、碇（いかり）を降ろして一時停止することになった。その夜を最後として、以後第一船も第四船もその船影を認めることができなくなつた。この頃から乗員には水三合、糲（あ）一合が一日の食糧として配給されることになつた。

三十日目ぐらゐから海水は濃い藍青色を呈し、油のような粘り（ねり）を持つた大きな波浪がゆつたりと襲つて来ては、船を山から谷へ、谷から山へと運んだ。船は進んでいるのか、後退しているのか、船員以外の者にはちょっと見当がつかかなかつた。海の色が藍青になつてから逆風が吹く日が多くなり、その度に船は碇を降ろし、漂流することを避けて一日でも二日でも順風が来るまで、そこにそうしていた。

四十何日目に初めて烈しい暴風雨に見舞われた。それまでも何回か小さい暴風雨には襲われていたが、その時のような大きいのは初めてであつた。暴風雨は午頃始まり翌日の午まで続いた。一時は海水が滝のように船内に落ちて来た。

その暴風雨の夜、普照は闇の中から戒融の声を聞いた。波と風の音

の中からその声は聞えて来た。誰へ話しかけたのか、それだけの言葉では判らなかつたが、普照はそれが自分に向けられたものであることを感じた。

「いま、何を考えておる？」

戒融の声はそう言つた。

「何も考えていない」

普照はいつか同じ質問をされた時答えたように答えた。普照は難船への恐怖に襲われていたが、戒融の問いに対してひどく腹立たしいものを感じた。戒融の人を食つたような不逞不逞しい顔つきも、ぬうつとした大きな体も、それがこちらを向いているのが、闇の中に見えるようであつた。

「なんにもか？」

戒融は念を押して来た。そして、

「俺は考えている。死ぬのはごめんだということな。犬死は厭だ。お前は厭じゃないのか。俺は厭だ。死ぬのはまっぴらだ。それからもう一つ、こんな全く同じ立場にあつても、人間は結局は自分だけだということを考えている。そうじゃないか」

波と風の音がそのあとの戒融の言葉を消したが、次に急に騒がしさの消えたひっそりした短い時間が来た時、恰もその刻を待つていて、その中に投げ込みでもするよりに、

「俺も考えている」

突然栄叡が言葉を発した。戒融ではなくて栄叡だつた。

「こうしているを、いままで多勢の日本人が経験して来たということを考えている。そして何百、何千人の人間が海の底に沈んで行ったのだ。無事に生きて国の土を踏んだ者の方が少いかも知れぬ。一国の宗教でも学問でも、何時の時代でもこうして育つて来たのだ。沢山の犠牲に依つて育まれて来たのだ。幸いに死なないですんだらせいぜい勉強することだな」

それは明らかに戒融に対して投げられた言葉だつた。それに対して

戒融は何か叫んだが、その場はそれでお仕舞いになった。議論どころではない状態が、それから晝方まで続いたのである。

普照は栄叡が呷鳴った直後、先刻から恐らく生きた気持もなく恐怖と戦っているに違いない、玄朗の居るあたりの闇に眼を当てていた。

普照には、身を晒めるようにして口も利けないでいる玄朗が、一番素直な、真実の姿であるように思われた。戒融の言葉にも、栄叡の言葉にも嘘偽りはなかったが、併し、玄朗の見栄も外聞も捨て切った身の投げ出し方が、いつもはそれに多少の反撥は覚えていたが、こうした場合には一番好感が持てた。

普照自身の心はこの時他の三人とは少し別のところにあつた。いつも彼は何ものかと闘っていたので、特別違つた状態に置かれているという思いはなかつた。もう何年も、毎日のように色慾との陰惨な闘いがのべつに彼を捉えていた。ただ、現在はそれが死の恐怖にかわっているだけの話だつた。そう普照は思っていた。

この暴風雨のあとは、船中はひたすら神仏への祈りに明け暮れた。住吉神社や、観音への祈願が行われた。栄叡は法華経を船の人たちに講義した。戒融は相変らず体を横たえていたが、普照と玄朗は身を起こして傍でそれを聞いていた。所々間違っているところが普照には指摘できたが、黙ってそれを聞いていた。

第三船が大陸に近い小さい島々で順風を待つために徒らに日を重ねて、漸くにして蘇州へ漂着したのは八月であつた。筑紫の天津浦を出てから実に三カ月間以上船は海上を漂っていたわけであつた。他の三船も同じ八月に相前後して蘇州海岸に漂着した。

広成らが蘇州に漂着したことは、直ちに蘇州刺史錢惟正に依つて中央に奏せられ、接待役として通事舎人章景先が蘇州へやって来て一行を慰勞した。それから一行のうちで許されたものだけが、大運河で汴州へ上陸、陸路洛陽に向うことになつた。

大使広成らが洛陽にはいったのは翌天平六年、つまり、玄宗帝の開

元二十二年の春四月であつた。蘇州へ漂着してから約半歳を経ていゝる。一行が西都長安にはいらず、東都洛陽にはいつたのは、玄宗帝がこの年洛陽に幸して、そのまま長安には帰らず、唐の朝廷は洛陽にゐつたためであつた。

広成等一行は唐廷が洛陽にあることに何と云つても大きい失望を覚えたに違いない。これまでの遣唐使の一行はいずれも差し廻しの官船で一路長安に向つており、上都長安駅に着くと、内使の出迎えを受け、ここで最初の饗応に与り、それから馬で長安にはいる。滞在中の宿舎四方館に旅の疲れを癒す暇もなく、宣化殿に於ける礼見、麟徳殿での謁見、内裏の賜宴、それから中使の使院に於ける豪華な宴会。

——そうした長安の都に於ける華やかな行事の数々は、広成らも何回も耳に入れていた筈である。勿論洛陽に於ても、同様なことは行われたが、日本使節にしてみればやはり長安の晴れの舞台に自分を立たせ、そこで大唐の春を満喫したかつたことであらう。

洛陽にはいった広成らは唐帝へ献上品として、銀大五百両、水織纒美濃絁各二百疋、細絶黄絁各三百疋、黄糸五百綯、細屯綿一千屯、別送綵帛二百疋、疊綿二百帖、紵布卅端、望陀布一百端、木綿一百帖、出火水精十顆、出火鉄十具、海石榴油六斗、甘葛汁六斗、金漆四斗、——こういった物を贈つた。

一行の幹部たちが国使として四方館に迎えられ、そこで忙しい毎日を送っている頃、同じ洛陽にあって唐政府に委託された留学生や留学僧たちは、その勉強の目的と希望とを斟酌されて、それぞれ適當なところへ配されていた。普照、栄叡、戒融、玄朗の四人は大福先寺に入られた。四人が大福先寺に預けられることになつた動機は、普照が希望する寺としてここを申し出ていたためであつた。普照はここに『師宗義記』を著して、法藏の『四分律疏』を釈した高僧定賓がいることを知つていて、定賓について法を受けようと思つていた。こうしたことになると、普照の知識は遙かに他の三人の留学僧を凌いでいた。

大福先寺は則天武后^{すくね}の母楊氏の邸宅の跡にあって、上元二年（西紀六七五年）にここに太原寺が立ったが、後改めて魏國寺となり、天授二年（西紀六九一年）にまた福先寺と改まっていた。境内も広く、塔も、伽藍も立派であり、坊舎も多かった。三階院には吳道子^{わだうし}の画く地獄変があり、三門の両頭にも吳画があった。

日本の若い僧侶たちはこの寺にいつて間もなく、この寺が釈場としては大きい歴史を持つていたことを知った。二十年程前に物故した義浄^{ぎじやう}は『金光明最勝王經』等二十部百五十卷、『勝光天子、香王菩薩呪、一切莊嚴經』等他四部六卷の翻經をここで行つて、『大日經』を釈したものはほんの十年程前のものであった。そういうことを知ると、さすがに留学僧たちは身の緊まる思いを感じた。

留学僧の生活は比較的自由であった。普照らはまず当分会話を覚えることに専心した。戒融だけは、どこで覚えたのか、唐語を喋ることができた。洛陽の街衢^{がう}はさすがに大唐の二つの都の一つだけあって、日本の留学僧たちの眼にはまばゆかった。奈良の都とは規模も違い、その殷賑^{いんげん}さも比較にならなかつた。周時代の王城の地でもあり、後漢、北魏、隋の都でもあり、その持つ歴史の大きさも日本ではこれを求めることはできなかった。

四人の日本僧はそれぞれ違つた坊舎の一室を与えられて、そこで生活をしてきた。留学僧は縮四十疋、綿百屯、布八十端を出発の際下賜されて来た。併し、一応、唐の政府に引き渡されてからは、生活費はこの国から支給されることになっていたので、すぐ日本からの下賜品を金に換えなければならぬようなことはなかつた。

大福先寺の生活が始まつた春から夏へかけて、普照と栄叡と玄明の三人は、自由な時間は、^{つく}尽く都の名所仏蹟の見物に当つて来た。眼に触れるすべての物が驚愕と讚嘆の材料であつた。三人の若い僧には日本という国も、奈良の都もひどく小さく貧しく思われた。戒融もまた春から夏へかけては、普照たちと同じように洛陽の名所仏蹟を廻つて

歩いてしたが、戒融だけは一緒にならず自分一人の行動を取つていた。夏になった許りの時、普照は戒融とたまたま彼の宿所となつていた坊舎の前で顔を合わせ、珍しく戒融から誘われて、彼の部屋へはいつて行つた。その時、戒融は、例の幾らか人を莫迦にしたような、いきなり相手に問いかける言ひ方で、普照に、唐へ来て、何を一番強く感じたかと訊いた。普照はまたかと思つた。そして船の中のように、よほど何も感じないと答へようかと思つたが、

「来てよかつた。来てみなければ唐という国は判らないからな」
「そんなことを素直な氣持で口に出した。すると戒融は、なんだ、そんなことかといつた顔をして、

「俺は唐へ来て初めて見たのは飢えていた人間だ。お前も見たらう。蘇州へ上がつてから、毎日のように飢えた難民ばかり見た。いやといふほど見せつけられた」

それは戒融の言う通りであつた。普照たちが唐の土を踏んだ前年は、夏前の早魃^{はやがら}と秋の霖雨のために、作物は実らず、ためにどこへ行つても飢えた人間が溢れていた。何十年にもない饑饉だということだつた。

「あれだけの難民がいたら、日本なら大変なことになる。この国では雲が流れるように、黄河の水が流れるように、難民が流れている。まるで自然現象の一つのようじゃないか。經典の語義の一つ一つに引懸つて日本の坊主たちが、俺にはばかに見えて来た。きつと仏陀の教えというものは、もつと悠々とした大きいものだと思ふな。黄河の流れにも、雲の流れにも、あの難民の流れにも、結びついたものだと思ふな」

そんなことを一種の熱情的な口調で話してから、
「俺はいつか、この唐土での生活に慣れたら自分の足でこの広大な土地を歩けるだけ歩いてみるつもりだ。僧衣をまとい、布施を受けながら、歩けるだけ歩くつもりだ」

そう戒融は言つた。普照は戒融の大きな顔を見守りながら、戒融な

ら本当にそんなことをやりかねないと思つた。

「併し、何か選んで勉強しなければならぬだろう」

普照が言うと、

「机にかじりついていること許りが勉強と思ふのか」

戒融は決めつけるように言つた。併し、何を言われても、この頃はもう渡唐の船中に於けるような反感を、普照はこの男に感じていなかった。はっきりと指摘できるような形ではなかったが、少くとも、自分の持つてない何か特殊なものを、戒融が持つてゐるのを感じてゐた。

「一体、お前らは何のために唐へ来たんだ。何をやるつもりなんだ」戒融が訊いたので、普照は自分は腰を据えて律部を勉強するつもりである。それから日本へ優れた戒師を招することを託されて来ているので、自分の勉強をしながら、その地盤を作らなければならないと言つた。

それを訊くと、戒融は、

「戒師なんて招ぶのは、そんな大変なことじゃない。大袈裟な言い方をすんな。どんだん交渉して日本へ行つて貰つたらいいじゃないか。道璿はどうだ？」

いきなりそんな言い方をした。そして道璿じゃいかんか、と重ねて訊いて、

「一流の高僧なんて、なかなか行つてくれるものか。それに高僧なんて言われる奴は大抵八十、九十の高齢だ。よぼよぼした体で大体あの船に乗れると思うのか。三日もしないうちにくたばつてしまふだろう。何年掛けたつて事情は変らんよ。道璿でいいだろう。道璿に行つて貰へ」

普照もその道璿という律僧の名前も知つていたし、一、二度見掛けたこともあつた。年齢はまだ三十四、五歳であろうか。律に明るく、天台華嚴を学んで、日常のことすべて華嚴の淨行品に依つて行動してゐると噂されている人物だつた。彼は一部の僧侶たちからは特別

の尊敬の眼をもつて見られていた。

戒融は道璿で我慢しておけと言わん許りの言い方をしていたが、道璿にしてみたところで、そう簡単に日本へ渡ることを承諾してくれようとは思われなかつた。そのことを普照が言うと、

「當つてみなければ行くか行かぬか判らんじやないか。俺は道璿とは二、三度話したことがある。一度當つてみてやろう。なあに、行くよ。法のためだ」

最後の法のためだという言葉を、戒融は多少皮肉な口調で言つた。それだけで道璿の話は打ち切られたが、普照はその話をさして真に受けて聞いてはいなかつた。雲を掴むようなそんな話より、戒融がその前に話した流民の話の方が、いかにも戒融の話らしく、どこかに独自のものが閃いてゐるのが感じられた。

それから二、三日して、榮毅と玄朗が訪ねて来た時、普照は戒融の真似をして、二人の友に、唐土を踏んでからいかなることを一番強く感じたかという質問を出してみた。すると、榮毅は端坐している胸を少し反らせるような恰好をして、やや昂然とした面持ちで、

「俺はこの国はいまが一番絶頂だと思つた。これが一番強いこの国の印象だ。花が今を盛りと咲き盛つてゐる感じだ。学問も、政治も、文化も、何もかもこれから降り坂になつて行くのではないか。いまのうちに、俺たちは貰えるだけのものを貰つてしまふんだな。沢山の蜂が花の蜜にたかつてゐるうちに、各国からの夥しい留学生たちが、いまこの国の二つの都にたかつて蜜を吸つてゐる。俺たちもその一人には違ひないが」

そう言つてから、

「併し、それとは別だが、恐ろしく多勢の人間が生きてゐるな。仏教とも、政治とも、学問とも無関係に、生きものの意志で、食つて、寝て、生きてゐるな」

と言つた。戒融は「雲や黄河の流れのように」と言つたが、榮毅は「生きものの意志で」と言つた。普照が、